

後序

此みちの不通に此道を釋は。繪にかける女郎の胸づくしとつて。うらみいふにひとしく。此みちの不通此書を見るとも。紅毛人の口舌を聞が如くあるべし。通と不通の本阿彌は。此兩子にあらずして誰ぞや。野暮の見るもんじやアぬへ。とをひよせく

此むち來賀無禮亭において跋す

雜艶
話語
志
羅
川
夜
船

自叙

千兩の黄金も。三十二文の孔方も。悉皆一物にして。上は三浦の高尾。頼兼が城を傾け。下はぼちやくのお千代。折介が鼻を傾く。都戀に上下の隔なし。況賣色に於をや。中三の生る畠もなく。川岸妓の釣る池もなく。その流れの源は一ツなり。されば金欄の夜着も。煎餅の蒲團も。寝て見る夢に差別なし。今や一個の通子あつて。青樓の西岸に遊び。閨中の少婦が。愁を知らざるをしる。予其趣を一帖に述。初に武左と素見の二篇をくはへ。夷狄だも。殊あることを知らしめて。四方の遊子に。南延一片をはづませんと欲云々

山 東 京 傳 述



京東圖

羅川夜船志

目 録

- 武 左 の 初 會
- 素 見 の 高 慢
- 西 岸 の 世 界



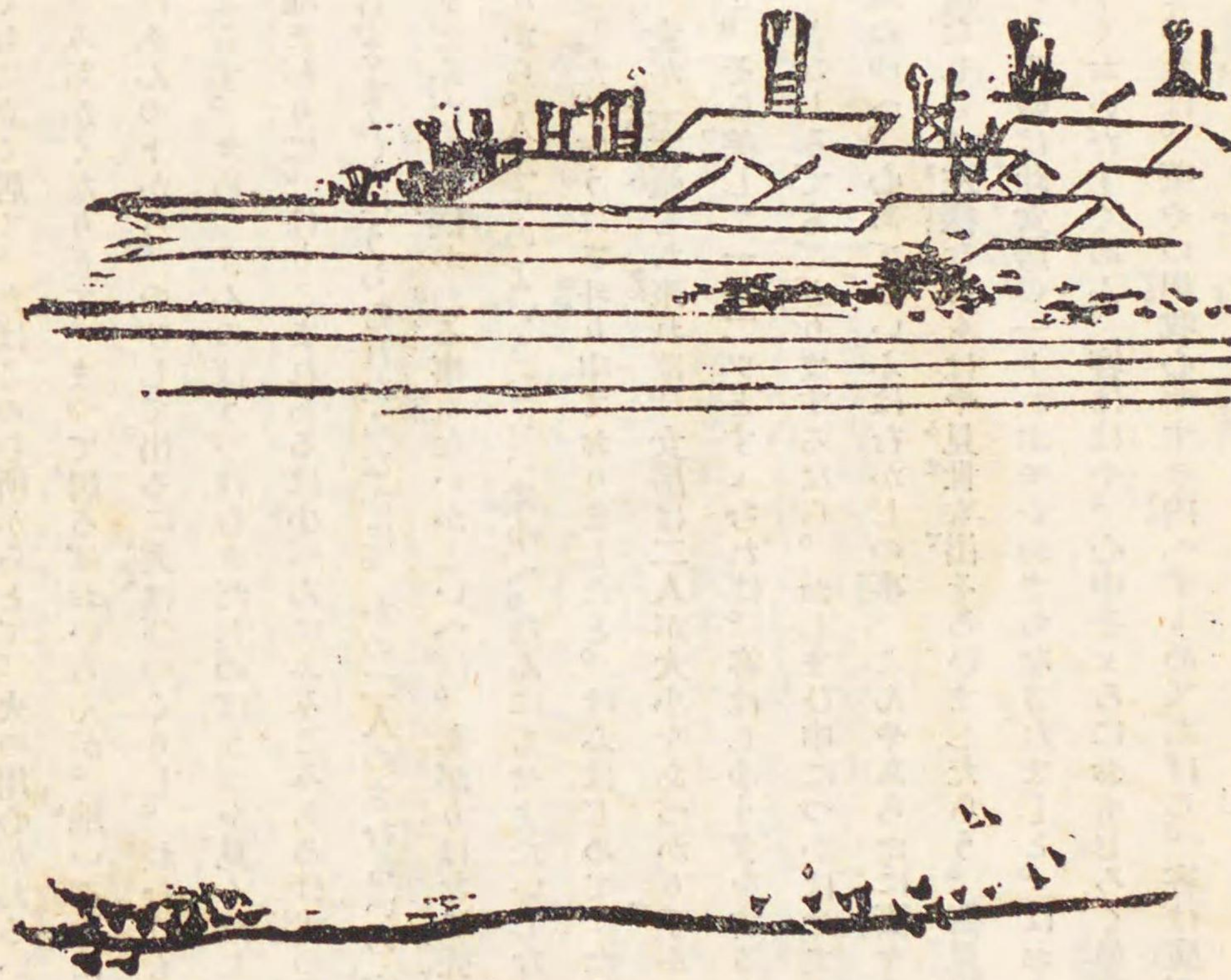
京傳画

山 東 京 傳 著

○武左の初會

人は武士なせ傾城に。きらわるゝといへども當生吉原の客は。七分武士にして三分町人なり。されど色里のならひなれば。ぶつさき羽織に。どう金づくりの大小しやんと小りしく見ゆるも又。異様なり大小と遠くねる夜も一ト盛りとは。お武家がたのじゆつくわいぞかし。此里に來ては武士のたましい。一寸もひかぬ氣になるは。戀はくせもの傾國のしるしなるべし。此客人一人は年二十五六髪おほたぶさにて元結澤山に巻てゆひ。淺黄の五分長じゆばんかいき縞の下着。黒羽二重の小袖もへぎこはくのはどびろき。帯を四角四面にむすび。黒縮緬の縮入羽織白糸にてべつたりと。ぬひ紋しはおりの紐大小のさげをとともに紫なり。一人は年五十斗りさかやき赤く。かほに白なまずできてはけまげふしほそく。かば色のじゆばん黒りうもんの小袖小紋の下着。とひさやの帯おなじ裕羽おり。玉むしの色の茶丸のうら。いづれも白き足袋に。なかぬきぞうりをはき。いつかどの家中しゆと見へ。いかにも茶やあるいはやり手まわしかたのよろこぶ客人なり。けふくわん音さんけいを。いひたてそれからそれたまりならで。はづみきつたる心をむりにおちつけ。ゑもん流しの衣紋坂ををりて。大門をはいれば茶屋の軒ごとに。七くわん音の夜とてりんぼうと。まん字付たるてうちんをつらねからんころんの駒下駄に。け出しまづまの八文字。お梅さんゆふべはおやかましうをつしたと。妙なる聲に女房がモシへちつとおあがりなされまし。そふならぬものさと。いひながらた

ばこ付ていたせば。かどくちに立て居て。たばこのむ所がらとて。火の用心がわるいと。とがむるものもなし。こなたには新造禿が長くなり。みぢかくなりして。まつて居るばおいらんが。地いろしにてれん茶屋へ。しけこみしあとなるべし。犬が茶やのあげゑんの下から。のびして出るに禿はびつくりし。ねむけもこれですこしはさめたるなり。中の丁のさまはいちやうならず。きめづきんのぼうづはむきだしのぼうづを見くだし。しやうわるな客はほうかふりに。さまをかへすけんは地まわりに。はりこまれあるは小べんにふみこみあるは犬の糞にすべり入り來人も出る人も氣は天上にのぼりいろくさまく。にうちむれたるなかに。かの二人のさむらいの客は。同役のしつた人の茶やを目あてにのれんを。のぞきどふだお内儀かわる事もないかといへば。あがりはなに禿の口上をき居たる。女房立てろくに見おほへもせぬ顔ながら。人からのよいさむらい衆ゆへ。なんにもせよたいじない客と見てとり。是はくお久しふりてよふお出なさりました。おうはさ斗り申ておりましたと。けふはじめてきた客にあわせぞくなつた口上もおかしくすはるやいなはや。女が盃臺もち來れば。女房は二人が大小をあづかり手あぶりかたよせて。さかづきをはじめ何やら咄はわからねど。そら笑して一ツ二ツとすむれば。客はしゆうぎをするにはや女房おち付顔。どこぞお心あてでもござりませうか。おなじみでもござりまするなら。おしまひ申につかはせましやう。イヤく此ごろのきびしいで。うちたへ此地へ來ぬゆへ。心あてといふはむかしの事。こんやあらたに妻をさだめるつもりさ。ほんでござりませうかへ毛頭いっはる所なしさ。左様ならもはや見世も出そろひましたらう。御見物なされませ牛介かてうちんとぼして御供しやれと。あいくる敷は此女房の一トかぶモシおまちなされましと。はおりのゑりを折てやり。左様ならごきげんようと。内證は早くおいだすくめん。客ははや。心中そとろにおもしろく鼻唄で。あちこちと見てあるけどよくこゝろ出てさらに決せされば。茶やの男我心やすき内へすめてあげる。客は廣ざしきにやうく茶やの男ととも三人なれば。居所にまよひ床の間の脇へ居る。女郎のすはる所なれば。茶屋のおとこきのどくがり。心のうちて笑



ひながらちつとこちらへお出なされませと。いところをかへさへすれば。ほどなく廻し方女郎の。たばこぼんもち
 来つてならへ。おさだまりの盃さかずきてうしいます。女郎のてるまで。客は大おんじやうにひる。おごりたる事尾しおに尾を
 付て見えをいひ。同役の友だちと三四ねんと。ちよつと来た女郎の出をくはしく知つたかほにはなす。この座
 敷のやうすにて廻しかたも。やぼなきやく人と見てとる。女郎もらうかを通りながら此やうすをちらりと見るゆへに。
 座敷へ出やうもことの外おそく。まわし方にせつかれてふしやうく。首くびきりばへださられるやうににべもしやう
 りもなき顔つき苦界くがいの身なればこそ。かはれますといはぬ計りの顔色にて。出ながら何やらほかの女郎とはなし小聲
 にて笑ひながら来て坐鋪ざしほへはいると。横の方むいてすはる。客は今まで高聲たかこゑで。はなししたるもきやうにそげて。こ
 との外小聲ほかこゑになり盃事さかずきごと。たばこのむにも心用こころもちひて。何か氣ぐらうになる。女郎は茶やの男にむかひ。ダイブまじめ
 だのどうさつしたと。初音はつねいづればその尾にとりつき。茶やの男すこし。おかしみをいふて。女郎をわらはせ禿かぶろを
 なぶりていやがらせ。客の方へもいろくはなししかけて見ても。とかくすこたんなあいつ故。座ざしきいよくか
 たくめいつてきて。客と女郎との中に一言一句のはなしもなし。客はあまりてれて手持なければ。れんじの障子しょうじをあ
 け。つれの男と天氣てんきのうわさや。あしたの奉公ほうこうの番ぐりをはなし。小聲なり。茶やの男あまりきのどくさに。ちよつ
 と内へ知らせて参りまじやうと。てうちんとぼし廻しかたに頼たのんで出行ば。客はたのみに思ひし。茶屋の男かへれ
 ば。木から落た猿さるのごとく。しばらくにらめくらし居て見たか。どふもつまらずこはくながら。女郎にはなしか
 けてみれど。女郎どし顔を見あはせたばかりで。返答なし扱あつかいははいや。此女郎二人りともともに瘡かさかと思へばよつぼど
 すぎてふしやうく。あいと口のうちに返事したばかりに。とくものもいはれず。酒ばかりのんで居る是をとなり
 座敷から見れば燭臺しゆくたいのあかりしやうじに。うつる罔兩わんろうばかり折せりやうごくやうに見へて。あふぎのおとハチく。灰吹
 をたぐ音トンく。鼻をかむ音チンく

○素見高慢

すけん山すけんさんの手のてきふう「さふしたきぐくとしら菊のおなじ流れの身じやとてもコレむすこもなんぞうたはツセエだまりんであ
 りくと犬かほへるぜ。むすこ「いかさまわつちも。幾さんの所へでも。通つてちつと唄うたでもならひやしやう。きふう「ナ
 ニ公こうなどは。本ぎやうが通だから唄うたを習なまふよりちりからにすればい。月見などはよし原へ行いとがうてきに色いろことが
 できるぜ。む「ちりからも五秋ごきゅうさんはなくなるしはじめは向むかひ町へ出る。今じやア天神の助入すけいりより外ほかは。山の手にはご
 ぜへせん。き「はやへもんだ。そうこふするうちモウ坂カ本トへ出る。辻つじ駕かハイ且また那な貳に百ひゃくで二てふめへりやすか。き「二
 てふてよし原まで二百か。駕かそんなむだをおつしやらずと。いさくさなしにしめやし。き「二百ならおれもかついでゆ
 かふ。二てふて百なら乗のりふ。駕かそんな事なら埒あちは明あねへト跡あとへ。き「だれがあんな高へ駕のりも乗のりもんだ。二百出すと明あぼの
 へ行つて餘あま程ほど。うまひ世界せかいがかける。む「ほんにあの茶漬ちやづけのやちをか心まちをして居るだらう。よりなほるか。き「ナ
 ニあすこにも下くだりが有るからふさがりわらべだよ。む「おめへ毎晩まいばん出なざるかいつてもすけんかへ。き「コレサしづかに
 いはつせへ通りの人が聞きて外聞げいぶんがわるひ有り昔むかしはおれもはつた者よ。大町六十幾軒いくけんに五十軒ごじゅうけんの河岸見世がし見せ。てつぼうにい
 たる迄一軒も上あらね内うちはなくて。大門だいもんを打うたぬばかり。起風おきかぜさんといつちやア飛鳥とまりも落おちるやうだつが。すこし色事
 の筋すぢから。もめ大根だいこんができて酢すのこんにやくのと。うたせるから。ぐつといたちの道みちにしたよ。それだによつて今夜
 などもあそばふとおもへば。昔むかしそふいふ世界せかいを書かいて置おいた。名なにしをふおれが事だ。物を格か子こくどきの相生屋せいせいを一いばん
 御目おめにかければ。どの傾かたでもどつこい承知しょうち之の介すけだけども。それもむだな事だよ。功成こうせい名なとけて身みしりぞくとやらで。
 いつそすけんと云所いふところがありがてへよ。むすこなどもそふさつせへ。む「すけんも歸かへりが難澁なんじふじやアござへせんか。き「そ
 んならどこぞ茶屋ちやにひける所ところもあるか。あらばおれも附合つあつてやるふ。む「サア有リヤ有けれどもいひにくしいつて

しよせん引ケやせん きおきヤアがれ相談が出来るかと思へば。そんならやつぱり見物素見禪てんまか せ「此みのわの内が長ひからてへくつするねへ きこの先の横町といつて松葉やと丁子屋の別そうが。むかふ合て居るをれが大名だと。爰をくつと縫上ケをさせるよ せアノ何はおめへ きコレ明ぼの、前たかくれて通らつせへと行す 今見付た様子じゃアねへか せナニ誰も見へなんだ きヨシノ、時に公に素見の通をおしえて置ふ。まづ第一五丁まぢをそゝるにさとるやつは。まわりやうが悪ひから同じ町を二度も三度も通らねへければ。それ。ならねへは所をやろうが案じやしたソレからひんそろにぐつと伏見丁の。下直な所を見るはヨシカ。それから二丁目を下モから上ミへ見てすぐ江戸町へはいりやすソレよしか。それからけつまづかねやうに西川岸をつゝ切ツて京町そゝりの新町へ来て。それから羅しやうもん川岸を通つて。角町を打留メにして中の町へ出て。犬のくそのないはし通りを通ツて歸る何ンと。おそろかんしんだらふむすこあやまつたか せきついてもんでごせへす きかふいつちやア鹽ざるをどこへ置いて来たといふやうだが。かうまんでも鬘なでともねへがすけんではマア日本一の通だヨマアいつたら見さつせソレ傾が見世に居る癖をいつて聞かしやう。まづ小ざらしが三絃を弾く。御射山がくさぞうしを見る。玉かづらがはりひぢ。松人が立てひぎ。深山が琴をしらべる。瀬山が文をかく。七越がきせるを通す。扇野か耳こすり。かたち野が火いぢり。其外まじり小見世まで。だれはしやくをおさえる新造の。だれはいねむつて居る。こんなこつちやアねへ。つがもなくそれノ、に穴があるけれども一ツ朝一ツ夕にははなされねへ。ならうとおもはばおらが内へちよくノ、きつさつせへ せいつてもおめへ留主だからむだト せはなし行うち大をんじまへを 歌みだれ鳥口舌した夜のきぬノ、は きあすこはどこだと思ふ せ西河岸ト きおれが二夕晩三ばん連て来た。かうてきに通になつたの せこノ、からゆかれるとよつ程近ひね き爰はめへど牽牛七といふやつが。切られた所だそれから番小屋ができた せ何んだかおかしな匂ひがするねへ きム、又小つか原でやくそふだ。鼻へせんをかはつせへ此匂ひがすると。爰は降りたがるよ せそこいら

は歸る身では案じはねへヨ きソレその刀々二本があやまる大門へは一本ではいらつせへ せホンニ今忠五郎が所か。つんぼうが處へても。あづけりやアよかつた きそれも我方寸の内でありさ。此笹の中へかくして置がいゝ せひよつと人が きナニサしるもんだそこが。まだやぼだおらも無刀に成つてはいるよ。人はこねへか氣をつけさつせへ せヨシノ、きサアこれで腰がかるく成つたコウ懸八玉のしん造にとんだ。いきなたてひきの有りさうなやつがある。こんやもいれぱいゝが。いつもノ、建具やのかるこを見るやうに。格子ばかりしよつてるよ せおつな所に本屋が有るの きこれはげいしやの駒次が内だ。この格子が松葉やの別家だ火事の時分はみんな女郎がこゝにいた せ「まぢねへこゝでちよつと き小便なら奥田のわきがいゝ。そして公と羽おりを取かへてきよふおれがのはあんまりだだから。夕べの人がまた来たと直に格子さきて目につく せ「こんやは 賑だね き「マアいそがつと衣紋でもつくりの。いかに傾城買といふつらで大やうに大門をはいるがいゝト二人は大まんのうちへはいりけるが。出入のしげきにまぎれて。見うしなひその後をしらす

○西岸世界

いづくが鬼の宿とさだめん。よし原の假宅もおのか住家にかへれば。燒土にはへし。へんノ、草もすがゝきの音にのみ残り。材木の間に鳴しノ、ろぎもむかふの人とよぶこ鳥おぼつかなくも。只ひとり藏のさしかけに夜ばんせし若者も。はやきんノ、せんたるかほつきの壁土の山にひきさき紙の目印つけしも跡方なく。大工のはまりしどぶもふたができ。ひの木がかほる新宅のはんじやう。五町のにぎはひむかしに百倍せり。げにやけほこりとは此ことなるべし大町の家々はいふにおよばず。西川岸の夜見世も中洲兩國のうそさむきに引かへて女郎のかほつきにもはや。よし原のおもむきあらはるゝぞかしさいもん「西行いかにとありければ。どれノ、と見世をつかうらさんどふした。へんな顔をして居るぜ。中洲よりさむくなくつていゝの。しかし四ツ竹ぶしがきかれねへてわるからう 女郎「だれだ徳さんい。

どふりてきたやうな聲こゑをした。でへぶ遠くからきなんすね そり「あなたは里に馬はあれどサ 女郎「君をおもへばかへちくしやうめおばさんによくいつてくれなんし そり」をつとのみこみ山とゆきすざくらかな 女郎「ありやアどこのかむすこだつけね 女郎「ソレサ中洲のきりやのむすこさ 女郎「そふくゝあのとをい所からよくきんすねいゝこんだね 女郎「いろでもあるでおつしやう 女郎「物つきだねへ といふ折からおもてには三人づれひとり江戸ものにて名は源一人は田まちものにて名は久兵衛ひとり茶やのむすこ 政「こゝをちとみやうハ、アおもしろ狸ねこだはへ 源「こつちらの火いちりをして居る。女郎はひてへをかなづちで二ツほどくらはせると大橋のお今といふはたけたぜ 政「をぎやのあふぎ尾おさんをすぎがへしへすつたといふくびだ 久「ありやアあもとのやの半がめへとなじみさ 源「こゝへあがりほどふだ 政「おらアあやまらう 久「なぜくゝ 政「今夜はうらだから南一いてへそふいとがはしねへ 久「そんなら此ぢうのばんがあつたな。おらをはすしはうらみだぜ 源「それじゃア相談ができねへサアそんなら早くどこへでもきめて。あがらう。すこはらがきたのゝ天神だ 久「さむしいやつさほんに早あがるがいゝのさ。又ひけをうつとまごつきてうちんだ 政「いつそめうつりがしてきたのう つけつちやくせぬ所へ京町の書やくきかゝる 書やく「政公とふだヲ久兵衛さんもちさか戀には身をやつすの 政「モシきん猫のおなじみはどふだねこつちへきたらう。ゆしまのがけからもいゝのがきたそふだ 書「そふさ役年のらくじやうがあるのに賣女ばいぢよがきたからいそがしくつてならねへ 久「モシこのごろのまきはだがかんだね 書「あげや町の山豆まめさ 久「だがかちやした 書「ばたはわつちがとつたがおくがいゝ句さまわられてくびといふだいてくる宿やどでできるをほめられたいふ句さ 久「よくしたねへ 政「なる程こいつアまわたくびだらう といふ所へむかふから丁子 政「かく 久「なぜかくれる 政「かけがよらねへでこまりきるわな丁子やなどはりやうけんづよいからなをきのどくだ三人はまたさきを見物する 源「サアこゝへあがらうくゝさむくつてならねへ 久「あがるがいゝくゝ とうちへはいり政ははきものをもつてあがりそふにする 若者「おはきものはこつちへ 政「ホイ客人をおくつて大見世へいつたくせがうせねへいまくゝしい 久「しやうをあらはすの 若者「おみたてなされまして女郎あれこれときまる 久「おもしれへくゝ

ト二からへあがる川岸みせはちうかも 若「マアちよつとこゝにお出なすつてくださりまし ト三疊敷のまわし座敷へ三人ながら立てゐて 政「ごうぎにやけ穴やけのある疊かさねだどうらくものゝ布子を見るやうだ 源「おきごたつてねわすれたのさヲ、まだ大井ができてねへをうばく宗の本堂ほんだうのやうだぜ からかみの中よりは丹と茶籠ろくしやう 政「此からかみはよりかね公御入といふ道具だ わかいものは女郎あんどを 若「サアこちらへ ト三人を入れて下へゆく 源「これは書おきをよまうといふあんどんだねとどふつけすとひやうしまくだ 源「何か書てあるぜ 久「ナンダ「二朱出して海瀬うみせをかひに北の里 源「イ、くゝとんだねられたとみへる 久兵衛 棚たなにあるはし 箱はこをだして 久「ウ、上の紋は丸に五本ぼねの日の丸扇下が五三の桐こいつはひねつたもんだ三味せんぼりのおやしきかのよもやそふじやアあるめへ角丁の花山名順さんのもんだ トふたをとればはしがつほぶしのほそく 此はしがみのうはがきは惣兵衛ハ、アきこへやしたこりやア鳶澤丁川岸のふるぎやのばんとうだもしれねへ 政「こいつア露しやうと書てあるわかりやしたこりやア大をん寺めへのあけぼのからくる客だらう 源「あけぼのきやくは百六ツ 久「アわりいわりいろしやうおしやアそんなねがでる トむだくちうに用だんすの下の 政「これよさつせへそのひきだしにやアかたずみがあるぜ といふゆへ下のうすいひきだしをあけてみればとりのまのびいどのくま手一本田まちのちた 久「マア都鳥のくわんがある トひら 大山の ん房がかうやくトかいまんきん丹ト包長ぶさのやうじわる紙と小づかひ錢かけツツふく 久「マア都鳥のくわんがある トひら 政「もつてへねへよさつせへわりひしやれだうへにあるどなべをあけてみればつべたくなつたあ かすの子を 政「まんざらでもねへつまんでくひ こいつアつめてへ 政「もうよさつせへ わかいもの 若「こんばんはだいぶおさむうござります 久「どふだへにぎやかかへ 若「あまりにぎやかでもござりませんが中洲は宿ちんが高イからどふでもこつちがわりがようござります 源「こんたアみたやうだ角トのつたやにいやアしねへか 若「いゝへ大三屋におりました をくのほうよりぼうづ りほうきとりはぞ 若「此がきやアぞんざいなお客人のござるに 久「ぞうりだしてはうきなめにあわせる みなくゝわらふわかい かい 政「これてめへのひへはなをつたか 久「なんだこんのたびだなひねつたもんだソレてめへのせなかに大きなかきさきがある こじよく「コリヤアねみせびらきの時せいろうのすみへひつかけてやぶりいしたよ もつとも此こじよくは折ふし小づかひせにをぬすんでだぐわし

せんが政さんときなんしたからおまへも町のうちかと思つてさ 源「なじみがねへもきついうそだそうはとらの門のこ
 んびらだなじみがなくつてさしをつくものか 花「そふいふわけじやアねへが町のうちのものは一度か二度きては又ほ
 かへいつたり何かして生わるのくせに口がわるいからわつちらア町のうちのものと見いすとマアきめてからあがりい
 すのさ源「江戸の者なら一どか二どてこねへてもいゝかへ 花「何いゝもんでおすかわけてぬしなぞのやうな人は三ども
 四たびも百ねんもよびてへのさ トモはやすこしもちまへの手をだしかけてかきのめす所へこじよくかた手 小じよく「モシイあけてもよう
 にやくわんをさげかた手に茶づけちやわんへしやうゆを入てもちきたり
 おざりいすかへしげざとさんのおつせへすおめしをおあんなんすならこれでおあんなんしとさ 花「なんだ此子アおら
 アもうたべたよもつてゆきや 小じよく「それでもせつかくおよこしなんしたものをにおいていきんすよ トい、すて、
 下へゆく、 源「ナン
 ダにばな一ツはあいかう トやくわんのふたを とればゆどうふたを こいつはおもしれへ源公はいかなるたびもして見たがやくわんのゆどうふ
 これがはじめてだ此ちうよその女郎衆があんころ餅をかいにやつて土なべえ入れてどうするかと思つたら水をいれて
 かきまわすとおきにしろになつたそれよりアこれはいゝ案じだ 花「しげざとさんもゑんりよのねへはつの座敷へこ
 んな事をしてよこして 源「なんのゑんりよがいるものかこいつは一ツいきてへのうはしがねへ 花「そんならこれでお
 あんなんし トかんざしを ぬひてやる 源「ヲ、アツ、くこいつはうめへく トすこしくび をかたげ 何かてへぶ薬りくさいゆどうふだ 花「くす
 りくさいへヲヤまちなんし トやくわんをよくく 源「なぜわらふく 花「しげざとさんもばからしいこりやアしんぞう衆が
 山歸來をせんじるやくわんだものを 源「ヤレなさけねへそんならゆどうふはゆどうふだが薬湯のとうふだの 花「ヲホ
 ホくくく 政がねてゐるまわしぎしきのびやうぶのそとへ女郎一人來りあんどをかきたて、文を書何かふるしき包といつしよにおいでどこへか
 ゆく政めをさましはい出てふるしき包をあけて見れば重にくみふたぢやわんへににまめ中はとうからしうまに下はなづけにしや
 ひ又床のうちへはいりねたふりをしてゐるさきほどの女郎また來りみればだいなしにくひちらしてあるゆへびつくりして
 女郎「ヲヤくどうしやうのうねこかのうはらがたつよモウばからしい トびやうぶの モシ雪のさんく 雪の「めをさ 津山
 さんかへなんでおすへ 女郎「だれぞこゝへ今きやアしんせんかへ トいふ政は今めの 政「ウ、もちつとさつきだれだか女郎

衆が二三人のこゑでわらつて何かしてそうくしくしていつたつけ 女郎「にくらしいねへおふかたそんならげび川
 さんたちでおつしやうわつちやぬしたちにそふされるおぼへはねへモシきいておくんなんしわつちがあねさんが京や
 にお出なんすが此ごろびやうきていんすから見まいにやりんしやうと思つて一日かゝつてにたのでおつすわつちや又
 ぬしたちにこんな事をされちやアたちんせんからやり手しゆにいつくけてつかはしんす 政「そりやアじやだんでもわ
 りいしやれだしたがだれだかきつとした事はしれぬへ 女郎「何さてへげへしれておりんす 政「なんでもわりいじやう
 だんだ トしらすをきる此女郎あねの所へやるとはいつは地いろの所 女郎「どふもしかたがねへ雪のさんおめへと此客人とわつちとた
 へやろのゆへこうさてもじつはやり手にもいはれぬなり べてしまいんしやう是ばかりになつちややられやせん雪のさん下へいつて酒を盗んできなんし 久兵衛が床の中に月の戸かね
 ている所へあはたしくしん
 月「なんとかきんすへ 玉「清兵衛さんとき 月「モシぬしへ清兵へとはやつぱり清兵へとかきんすかへ 久「清兵へはあ
 りがたへりやくして書とそのやうに見る女郎しゆはおつな事を云もんだ 玉「しれさアかなで書ておくんなんしなサ
 ア早くサ 花「ぬしへ見なんすなわつちやはづかしい 久「小なみが山しなへゆくよふな事をいふの 玉「うちへよこすと
 わりいといゝなんしたけどこへ出すととゞきんすね 月「やつぱりかみいどこへたのみなんしな 玉「やつこのけつかへ
 月「此あいだのまつさんの所へさ 玉「あそこへきなんしやうそふしんしやうお有難うおすもしへお休みなんし ト出て
 月「アレおきなんしきざでおすまへ子をよんできいた 久「何あれは米のあげ下だ ト三人の床のうちいろく模倣あれ
 岸もわかる事なればこゝらはりやくすかくてだんふよもふけしんくと二かいしめて猫がぬすみひするころ
 となり右も左もごうのいびきまたはぼつちくくのむつごとおくの方の座敷で三味せんを水でうしにあわせいる
 歌「夜中はうらみ 曉のわかれの鳥とみな人にくまれぐちなあれなくわいなせとむきな耳にてもかねは上野か
 浅草か

艶語 志羅川夜船大尾

御製通雅 卷之四 子部 屋

令子部屋

令子洞房叙

京傳に水破の革の息子部屋あり。是を胴亂にせんとすれば。放蕩の唱にかよひ。これを巾着にせんとすれば。彼欠價に音あひ近し。其欠價に勞せんより。寧放蕩に遊ばむにはと。すきくしき心のすさびに。古し雨夜の品定を模し。かみの品しものきざみ。有趣人の規矩につきで。とあれはかよりあふさざるさに。あしといひよしとさだめ。よし原女郎衆のはりをゑらみ。遊子のあなを穿ぬれば。とみに一箇の囊入となれり。予囊中を探て作者のもと代を窺。意味は仙袂の巾着よりもかるく。論は珊瑚樹の巾着よりも敬し。所謂女郎買の虎の巻と。傾城の智慧囊と也。底を叩て口訣を説。疊を打て口舌を辯ず。通計都て十二篇。壹兩二部を一巻とし。以て新吹の楠廷尉が櫻井の巻に比して。海内の令子に授。郭中の花嬢に與よと進む。書肆何がしも禮を奪へるがごとく。遂にひつたくれんげの革細工をなす。いんでんや此世にうまれたる。土農工商。入込の遊治郎。是を佩て廢ざる事。助六が印籠のごとく然らば。期月にして通と成。女郎の涙を緒メとし四角な玉子を根つけとせん。豈蠶々洒落本の胡麻胴亂。此息子部屋に逮んやと。貴賤上下おしなめてみなかんせん縫のいとくちをしる壽。

戀川すき町

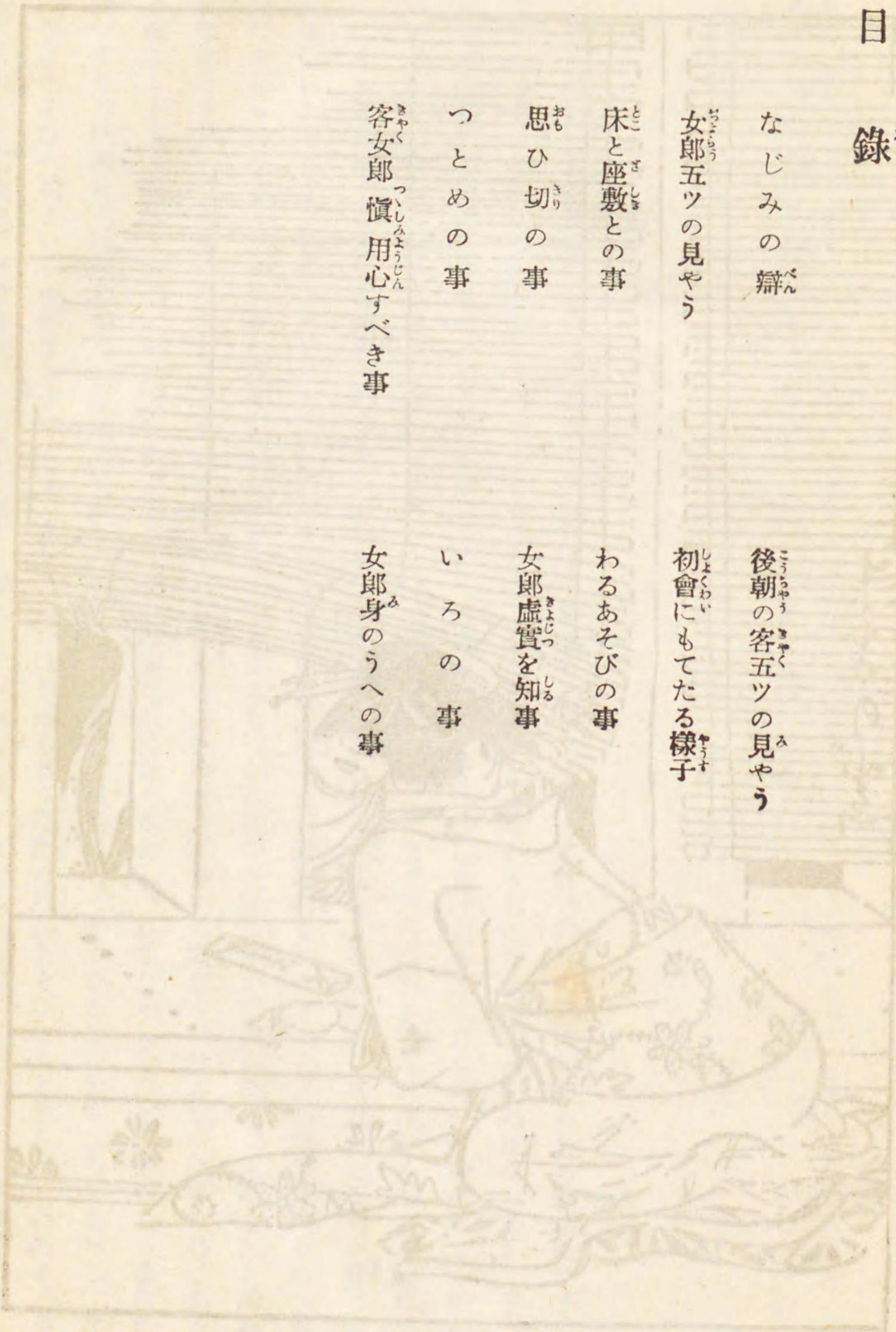
自序

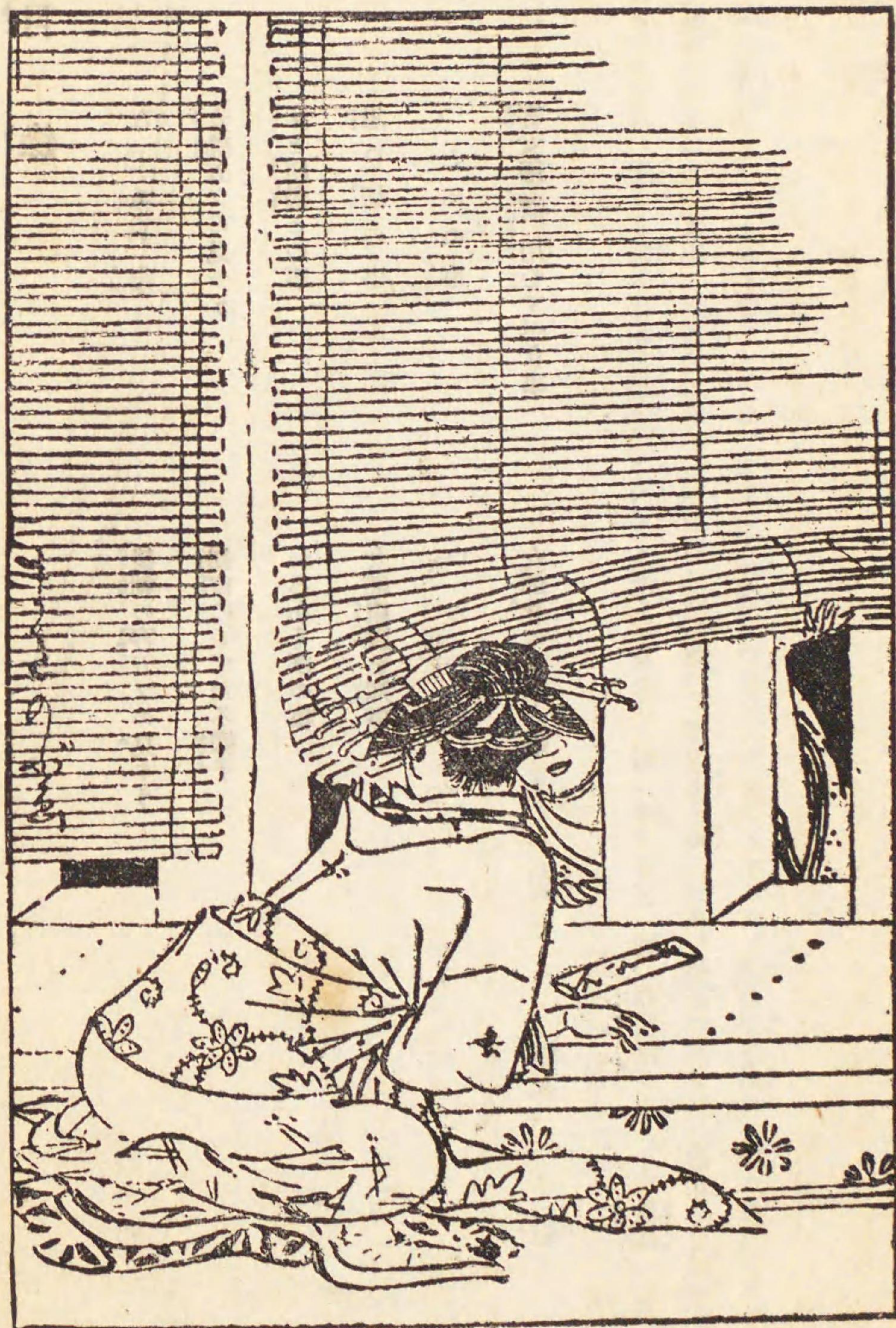
革の極品なるを。ムスコビヤといひ。女郎の革羽織なるを。ミジマイベヤと云。粧部屋の仇口に客の名たてば。息子隔室の無多口に。女郎の魂膽をはなす。印傳ならぬ京傳か。面の皮を製したる。虚言の皮を。又名號て。無粹語歴夜といへども。素より遣手が前巾着の。名代をも勤ず。むなしく箱に久しきを。頻に耕書堂の主人が。提物にあなふ。

作者 京 傳 述

目録

- | | |
|------------|------------|
| なじみの辯 | 後朝の客五ツの見やう |
| 女郎五ツの見やう | 初會にもてたる様子 |
| 床と座敷との事 | わるあそびの事 |
| 思ひ切の事 | 女郎虚實を知る事 |
| つとめの事 | いろの事 |
| 客女郎慎用心すべき事 | 女郎身のうへの事 |

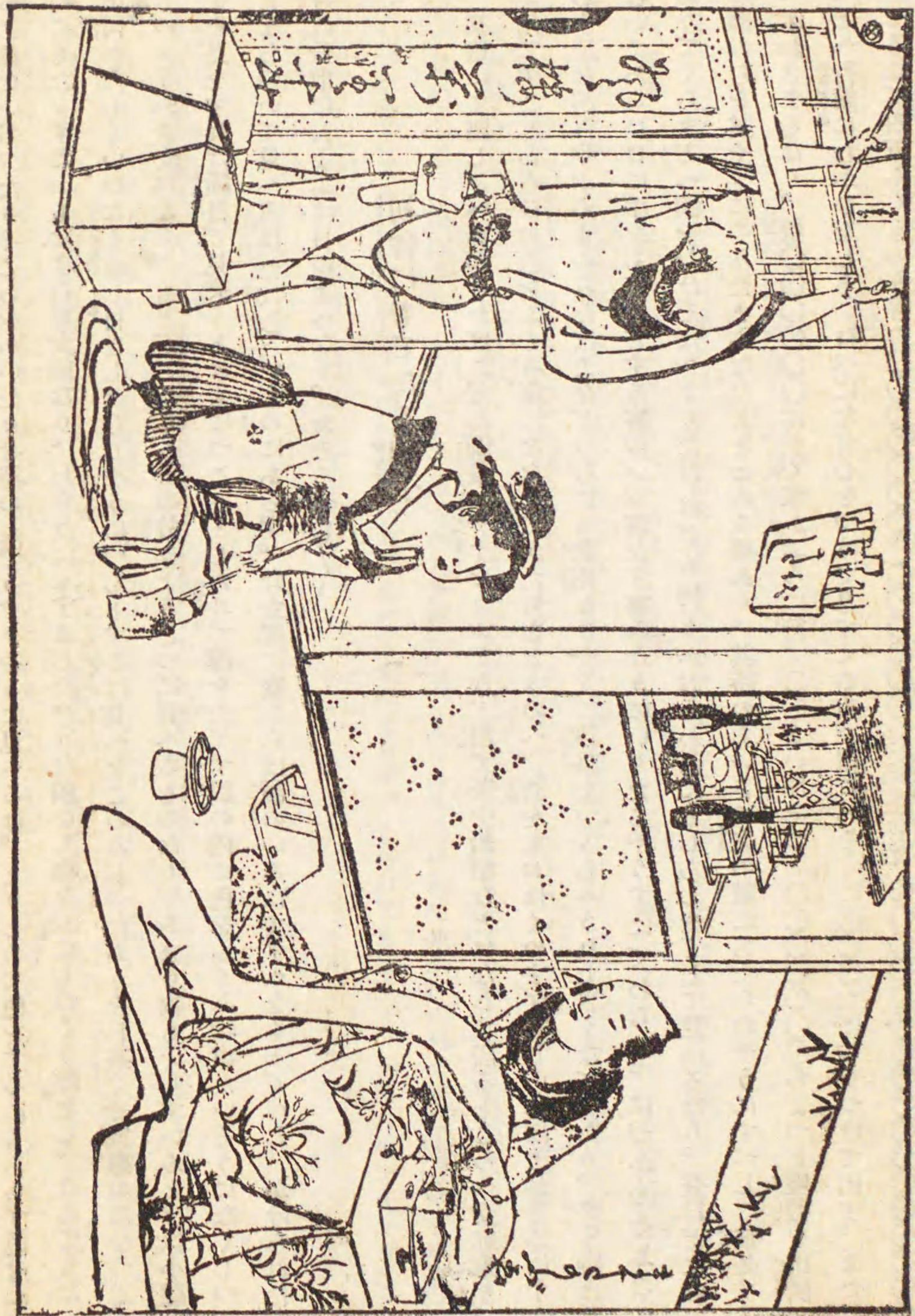




令子部屋

馴染の癖

或人問曰女郎買は貳十會位にすぐべからず。あまり心やすくなりては。内證の相談何かのもめ合諸わけ手くだ
 こんたんりくつ心をつかうばかりでなくさみはなし。しかればなじみふかぬうちがあそびの花ならんか。答曰女
 郎買貳十會くらゐまではあそびのうわ水也。そのうわ水をながしうひしあげたるこんたん諸わけむづかしくからむ
 か遊びなり。なんそうわ水をよしといふ事あらん。又問女郎はぜんたいなくさみにかふ物なればおもしろく興になる
 こそあそびなれ。こんたん諸わけ心つかひがあそびとは。答曰さればよ其花をとるものあり其實をとるもの有。女郎
 の虚實にかまはず。我ひとりなあそびに新造をいくらもあげ藝者をよび牽頭持をつれどつとさわひてずつかへる。
 是たのしみの花なり。かやうに花やかならずとも。座しきもしづかに遊びたがひにかざる心なく。くめんごと諸わけ
 萬事かたりあい。ともにたのしみともにくらうする實情をたのしむ。是あそびの實なり。此ふたつは客の心にあるべ
 き事なれども。其實をたのしむは客の心ばかりでゆかぬ事なればなりがたし。花をたのしむはどこでもなる事なれば
 仕やすし。同事ならば初會やうらより。なじみの所にてさわくは。家内も心やすくひとしほおもしろかるべし。なじ
 みなきあそびの花といふ事非ならずや。又問床をこのむはやほらしく座敷の内があそびなりと云人有。いかゞ。答曰
 是れもおなじ道理也。座敷は遊びの花床は遊びの實なり。いづれあそびならざるはなし。又問しからば其實をとらん
 か其の花をとらんか。答曰花も實ともにとるにしかず。たとへば座敷のあそびは風袋也。床のあそびは正味なり。床



○○○○○○○○。なるにあらず顔ばかりうつむひてはづかしそふなり。是は上々の出来なり。○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○。はあやなすのかしらねどもこつちの物と思ふべし。

床と座敷の事

座敷にてよくて床にてあしき事あり。是は外になじみある事などかまたはあしき人なりなどつげる者あれば。座敷にてはよくしたれども其譚を聞て床にてふる事あり。ざしきにてはあしく見へても床にてうつてかわりしやうに能事もあり。是は何ぞやすく見たかわるく氣どつたかきみがわるひかなれども床になるまでにあしからぬ様子やまごのしれたるなり。又何そ氣のもめる事があつて座敷つきあしくともそれがすみて氣がすみたるゆへ床にては能なる事もあり。又一座あれば座しきにてあしくとも一座の女郎と相談のうへ床にてよくする事もあり。生れついてあいそうわるき女郎やうらぎにも至極我氣しごくわがきにいれば笑顔えがよになるものなり。又女郎の氣によりてうちつけて物いふもあり。たとへば某がごときものは御氣ごきにいらぬはづなれどもせめて今一度御ごこし下されかしなどいふ事よろしきなり。しかれどもこふした女郎はすへのほどたのみかたし。またあやなしかもしれず。能々心を付あやなしならばはやくきれて仕廻しまわふべし。先からつき出されたるは見ぐるし。

悪遊の事

此あそび今は世上にあまねし。其行跡いこうせき一様ならずといへども。まづは日和下駄ひよりげだの類なり。此悪病あくびやうをうくる女郎はなかく丸裸まるはだかといふ病となる事女郎の難病也。うらか三度めくらいに夜見世よみよへ来て其の女郎を呼出し。なれくしい咄はなしなどしかけとめられたそうなくちぶりをいふゆへ。ぎりにもあがれといわねばならず。其所へ付込つけこみ。工面くめんがないのふと

ころが中の丁のそこは御しんにある事などから見てたりどふぞするならあがらうなどとあつかましく仕かけられ。せひにおよばずそのぼんは女郎の損となり。平の色に仕かけて口先ではませのつ引ならぬ無心をいかけむりにこつちから色事にこぢ付て引たをすなど。情の戀のといふさたにあらず。又茶やの男船宿又は友達なぞにたのみていひこんでもらいむりに色客にこしらへてあがりこすく斗立まはり物いらすにあそび。たま／＼物まへなどにわづかな事でもそうだしかければさま／＼にからんでにげたがり。せひやらねばならぬやうになると色を物どりにするの慾心女郎のとなんくせをつけてそれぎりでおさらば。其うへあの女郎をばとんだやすくかつたなど、拂物でも買たやうに手柄そうに我恥をふれあるく。人情をしらぬといへば人らしけれどもつらの皮あつき獸なり。中にはどふもくめんも出来ず友達中をかりあつめて。紋所の黒つむぎの小袖すりこ木程な袖口繩のやうな縞なこの帯。すこしは綿もちらつくを内の方へ廻し黄色でこそあれ緋縮緬の襦袢。毛はなしとも黒天鷲絨の半糸。赤くなつても其のむかしは黒ちりめんの頭巾。あたらしい物にははゞの廣ひ日和下駄。やう／＼形は出来ても囊中をのづから錢なし。せひにをよばず襦袢と頭巾をぬぎ捨てもたらず。友達の母近所の女房などをなげき布子帯などをかり出し。やう／＼こしらへて行などはかなき遊びと云ながら。女郎をほぎさへせねば哀なる方もあれども。かやうの身のうへの者に女郎をたをさぬはまれなり。にくむべし。くわしく云たけれども筆とるもうるさければあらましにてやめぬ。

思ひ切の事

或人問曰四代めの高尾が詞に。此里へきたらぬものこそ粹なるべし来るはみなやばなりといひたるよし。當世の通者といわるゝ人の新造かいてむだにしやれるはよく此詞にかなへり。奥州がてうちんにてれんいつわりなしとひらがなにて書せしも客におもひつかせん爲なるべし。さすればけいせいになきことなきに極りたり。答曰けいせいの一代に

あふ客何千人といふ數の内實にほれるは十人か二十人なり。其内にもうわ氣も有。男の方からだますもあり。縁のないもあり。眞實に一生の身の上をまかす所は壹人とどまる。その外の何千人にぬしの所へいきいすよはみなうそなり。爰にてけいせいになきことなしといふ事至極。尤なり。おゝくの中に一人に誠あるを以てけいせいに誠ありといひがたし。しかれ共誠をつくす時に至つては娘子ともげいしやなどの色をするうちがひめつたに脇へはふれず。其代に實とおもつてだまされる事またげいしやや地女よりあやうし。是をいやがりて女郎をこのまず地女をうれしがる色師は町人の商をきらいて盗するを好と同じ事なり。もとてをそんをせんとあぶながり只取の算用なり。かく云へばとて女郎に誠ある事をよく知りても安堵するはゆだんなり。我に實有女郎と思はばなを／＼心を付て色の出来ぬやうに用心すべし。右も左も色の中なれば。我に實あれば外へ心はうつさぬものといふたしかな證文もなし年久しく馴染たるうへはかくべつさもなきうちしばらくも遠ざかれは。其内に了簡のかわる事有ものなり。又問女郎のほれるはいかやうなる所へほれる物にや。答曰まづ初會にあがりうらに行三度めにも行。女郎もずるぶんよくつとめ段々なじみがかさなるにしたがい。そばからきまつたのほれたのといわれ。もとがあまりいやでもない客ゆへつとめ段々なじやうな氣に成。段々と馴染はかさなる。わかからは何のかのといひ立られしばらくあわぬとよびたいやうな氣に成もの也。そこを久しくゆかねば眞實ほれぬいたといふてはなし。いつか其やうにもおもわぬうち又外にそんな物が出来もはや初手のはわすれてしまいいやに成物ぞかし。いきな人じやの男がよひのすいたのとてほれるはうわ氣にて中々すへはとげず。見へがよいの金があるのとてほれるは慾心なりほれたにはあらず。この女郎は年より出家あさぎうらなどをすく物なり。名の高ひ人じやの通り者じやのとてほれるは名聞なり。いづれもすへたのみがたきほれやうなり。すべてはやくほれるははやくさめるはじめなり。貨さかつて入るものはまたさかつて出る道理しるべし。いづれ此方に實なくては女郎にも實はないと思ふべし。又問しからば此方よりほれた體にもてなし實らしくするが粹なるべ

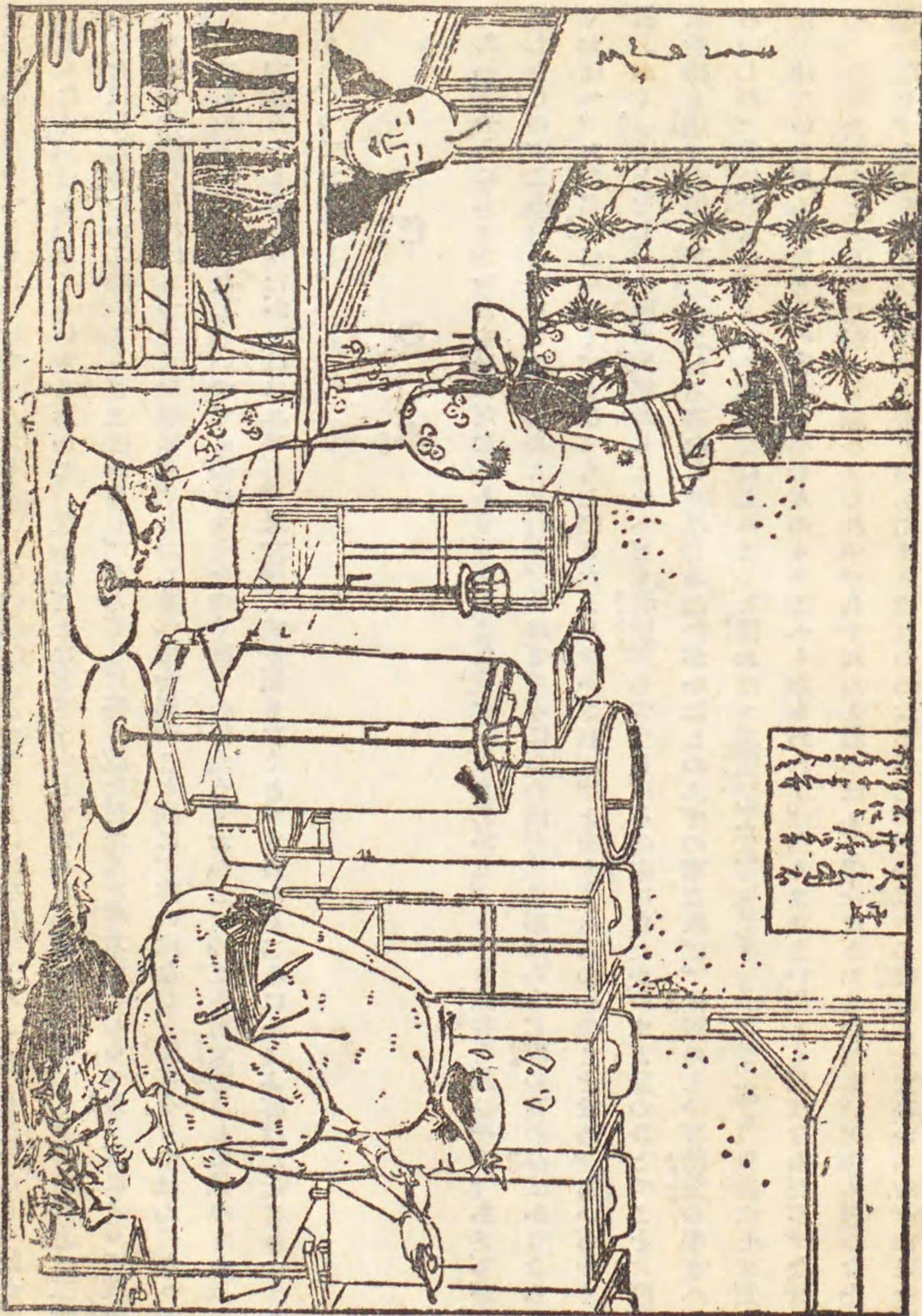


しゃ。答曰粹といふはそふした物にあらず。女郎のかくす事を知りてもしらぬていにてすまし。女郎に不實な事あれ
 ばさつぱりとされ。わけの立た事は何もいわずにをんくわにして此方の實をもつて女郎の實を得る天然自然の徳ある
 を粹とはいふなり。女郎のあなをいひほれもせぬにほれたふりをし口さきおもしろく女郎をはまらせるをすいと
 いわず。女郎も同じ事にてだますばかりが女郎にもあらず。もとより情を賣物にする身なればうそもいはねばならぬ
 はしれた事ながらうそもうそによるべきなり。すかぬと思ふ客にてもよくあいしらいおもしろくあそばさるか商賣な
 れば。にくいとおもふてもかわいそふな身ぶりをし。そつちへのけといひたい口からこつちをむきなんしといひ。よ
 こつらをくらわせた手てたき付は尤なうそなり。此虚はうそにてうそにあらざ勤の道をまもるのなり。かくつと
 めるも何の爲ぞ世渡りの爲なれば物目を仕廻わせ物まへのそうだんねたり言。客の身分により相應々々のことは有う
 らなれども。あいたる時には辯にまかせてかけのめし。歸つた後ではあいつが人の氣もしらずにこんな事をいふの
 んな事をきくとくやしいのとわるくいひ。しかも地色の仕きせをする金迄をひつたくる。いかにつとめのならいな
 ばとてあんまりにくいしかた天道ゆるし給わんや。かやうなる不實の心なきものならばたとへ岡場所端々の女郎なり
 とも高尾薄雲が下に出べからず。いかなる全盛の太夫なりともどうよくな實なし女郎はうその皮はぐ〇〇の女房とな
 すべきなり。女郎をさへ其不實をにくむ。いわんや客の身としてほれぬ女郎にほれたふりをしてつとめを出させむし
 んをいゝ口さきて一ぱいくわせしまいはたきばなしにするなど、はあんまり情ないやつなり。しかし客にどろぼう
 あれば女郎に追剝あり罪は五分々々と云べし。凡客の心得女郎にほれたらば實をつくしほれずはやくやめてほれた
 所へ行べし。いか程實らしくほれたふりをしたればとてうそはすへにあらわれぬ事なし。ほれた共ほれぬとも我生の
 通りにしてそれで氣の合女郎にあふべし。我持まへでそりの合ぬ女郎ならば。やめにして脇へ行に手間もいらす。女
 郎も我も互に氣が合實があらば勤の身なればとて戀も情も有べし是天の道理莊子が所謂造物者のあたふるなり。女郎

をおそれていたくもないあたりに鉢巻をし。翌日迄の氣あつかいもぬしゆへなればと。苦勞はかへつてたのしみとし。傍輩にもしのびて跡や先に成つたる文をかいて半切の一卷もつかひ。かへすゝとかいてもたらいでおつて書をかき。それでもたらぬゆへ書添をする。あけて見ればみなをなじ事なり。きのふのうれしさよいらのくたびれ心はもだく、いひたい事はやまゝ人めはつゝむ氣はてんぐするゆへ。かんじんの事はおとして。やくにもたゝぬ同じ事をいくらかくものなり。是は實なり。又わが座敷へ女郎多くあつまり。てんぐの色客のはなしをするはよし。一通のはなし斗して居るはよいにもあらず。これにはいかふわけあり。又夜見世の出ばなに格子よりそつとのぞき。見世におらばつれに我名をよばせて見べし。其時急に立てさきはまはるは實なり。少しもいそぐけしきなくふせうぶせうに立てあたりを見るはいかほど座敷や床にてよきとにもせものなり。つれもなくは自身格子より其女郎の名をよびて見べし。實なればにつこりとし。うれしそふにとる物も取あへず立て内へ入り。ぞうりも片あわせにはいて。客そとをれば早々かけ出。御無事かいかと問。客をば我座敷へいれ。其身は外の座敷へ行て鏡を出し。白粉をぬるやらふくやら。べにを付るゑもんをなす。氣違ひのやうになり人のいふ事も耳にいらすとんだあいさつなどしていそがしそふに座敷へ來り。たばこ入も鼻紙もわすれ今思ひ出したやうに禿をよび見せより取よせ。すわりはすわつたがなぜか人が居てははなしがないやうにして居る。皆實なり。心をとめてあいとぐべし。さりながら女郎の氣により是程にしても又外へうつるやうなうわ氣もあり。あてにならぬは此里ぞかし。心こゝにあらざればくらきにまよふ戀の闇これ闇ならしやうことがない。

つとめの事

ふかくなじみたる女郎にふぐ汗葱あさつきなどすゝむれば。女郎も心よくくふを客うれしそふにうち笑ひ。我にへ



だてる心なきゆへとうちとけて。ふたりが○○○○○友だちなどにはなしてよろこぶなどこけらし。此女郎は何の氣もなく只はしたなくいたるおかし。又かねごとなどさういしてさもなき方へ實をつくし。つい其方へ二世かけたるをはらたちいかる時のありさまばかりし。かんざしに客の紋を付たるを何本もこしらへ置。客によりて紋所ちがうも是皆世渡りなればもつともな事なり。しかしすべて女郎のことに。客のはなしを聞てそりやほんにかへといふ程つまらぬあいさつはなし。いつでも客はうそをつく物と心得たるもおかし。つまる所女房にして見ぬうちはたがいにいつ迄もろんじてもうたがいははれまじ。又女房にする氣もなくとうざのなくさみにかよふ客はなをさらい、かげんにうたぐつておくべし。

色 の 事

あわてやみにしうさをおもひあだなるちぎりをかこち夜をひとりあかし。とをき雲井を思ひやり。あさぢが宿にむかしをしのぶこそ色このむとはいわめとあれど。あはてやみにし心ほどうき事はあらじ春の夜の夢ばかりなるもながくおぼへ。おなじ里にちかくすまひてもしばしたよりきかざれば。とをきくもゐの心地こそせめ。あいぢやくの道其根ふかく源とをし。六塵の樂慾多しといへども皆厭離しつべし。その中にただかのまよひのひとつこそ。座敷持も部屋持も廻り女郎も新造もかわる事なし。はじめはたがいにしのんでの事なれば。内證のしゆび傍輩の手まへ迄つくろいしが。色は分別の外といふ事が身にしみくと聞おぼへ。孝行のために身をうりし親の事も。世話にして貰ふてかたじけないと思ふたなじみの客も。恥も人めもきこへもおもわれず。あんまりよい男とも思はなんだが。なぜこんな心になつたやらとおもひながら思ひきられず。わすれんと思へばおもふほどおもひ出し。どふも思ひなをされぬものなり。そこをおもひなをすはもとがあんまりほれぬのなるべし。思ひ切たる後はふたたびいろをせぬこそ誠に女

郎一疋なり。はじめはふかくおもひても。ついとをざかれれば。さるものは日々にくとく。昔の貞女は今のたわけと思ふが當世女郎の十人並の心なり。心やすひからおこりつい手がさわり足が障り。はじめきたないやうに思ひし顔も見れば見るほどすいたやうで。其の男のわるひくせ迄よく思はれ。無心いわれるればけつくりしいやうな氣に成り。くめんしてはだかになるをしらぬは傾城の氣しやう。それをそまつにする客はばちがあたるべし。又客をわるひと思ひて見れば見るほどいやに成物なれども。色といふ名がつけば。はじめいやと思ふても。色といふ名にひかされて。ついでいやでもなくなるものなり。女郎の口さきでほれて。心で舌を出して居るをばしらず。實になつてかよふ客を。すこしはむごいとおもひそうな物なり。それを思はぬ女郎はとも行末よかるまじ。さりながら兩親は下に居る二階で出合。屋根船で色をし。親をば柄へ出して寵の番をさせ。飯焚同然におもひ。しかり廻して不孝するとも思はぬ床藝者踊子などからくらぶれば。傾城ほどまこと有ものはあらじとおもへとも。色をも香をもしる人ぞしるなるべし。

慎 の 事

客の慎べき事名代とりてはら立はむりなり女郎の仕方によるべし。もらひかけたる女郎をやらぬはわるし。きれて又つれか茶や船宿などをたのみ手をいれて立かへるまじき事。同じ家の女郎と色ぐるいせまじきなり。我氣にぬけめがなくとも顔へいだすべからずかほはやぼらしく見せておくべし。我あいかたの女郎とちわするはやぼらし。新造やりて廻方禿などを詞きたなくいふはやすし。ゑもんをつくり帯をなをしあせ手拭などを多りにまくはいやみなり。せいたいをぬりをしろいをつけつくり髷して物いふはばか、し髪さかやきはせずとも身にあかを付べからず鬘爪のびたるはきたなし。身のうへ身代諸藝衣類男ぶり自慢顔なるはむねわるし。ぢんぢやうふるは初心らし。心にもなき

すへのやくそくすべからず。外の座敷のうた上るり三味線などそしるべからず。よくねたる女郎をおこすべからず。初會にふられてはら立べからず。女郎のたんすの中などあけて見まじきなり。名代の女郎に手を出す事なけれ。横に來たる女郎久しくとめておくは心なし。客をせくは心せまし。金銀の約束まちはぬやうにすべし。はじめより我身のうへをあかす事當世の女郎買多くする事なりよろしからず。女郎のおさな名はやくとふべからず。長居つゞけすべからず。女郎の憤べき事第一地色すべからず。げいしやたいこもち茶屋の男などとあまり心やすくすべからず。うたがいうけるたねなり。色になづみ客をそまつにすべからず。色にかまけ氣のもめるにまかせ髪かたちとりみだす事たしなむべし。腹の立時すかぬ客科もなひ新造禿などにあたるべからずはしたなし。禿の行儀詞いやしからぬやうに仕付べし我新造の人から禿の行義にて姉女郎の身もちまてしるゝ物あり。髪を切起請をかき爪ははなすともゆびを切り物はせまじき事一生の疵なりほり物はたとへやきけしたりともあととはきへがたし。わかきものゑこひいきすべからず。むり酒ひや酒きまゝ酒第一身の毒なり。茶碗さけのむ事客の氣によりてあいそうのつきる事もあるべし。はづかしからずともはづかしきていをするは女の情なり。大口などきくはさがなし。すそ高くまくりてあるくべからず。客のまへにて耳こすりすべからず。女郎の氣によりてなじみもなき客の見る所にて外の客へやる文をかき事ありよからぬ事なり。客の紙入ことわりなしにあける事憤べし。

女郎の用心すべき事。初會よりふかくほれたやうな事をいふ客。はじめより我身の上あしきといふ客。初會にくらうそうな顔色又は至極色あしき客。女郎をやく寝入らせたがる客。口先の至極おもしろき客女郎のお所帯のあしきかよきかをしりたがる客。

客の用心すべき事。口へ出してほれたやうな事をいふ女郎。宵から女郎のそわ／＼する夜。度々座敷をあける女郎。内のこしもとあるひは茶やの女若ひものなどと耳こすりする女郎。裏茶屋と心やすひ女郎。男げいしやをよばせたがる女郎。小用に行ておそく來る女郎。はものを手ちかくへ置女郎。

女郎の身のうへ

花は櫻木人は武士なせけいせいにきらわるゝ其行義ただしきをこのまぬ情を云たる付合の句なり。女郎の身うへほどあわれにおかしき物はあらじ。朝夕のめしに物のいらぬばかり。その外は世帯もちにかわらず。それさへあふらげなすびづけそば切なんど座敷持部屋持も襖障子のはりかへ疊がへ部屋座敷の代の算用迄いづれか身のあふらならざるはなし。もとより手道具調度はいふに及ばず。あぶらもとゆひべにおしろいくしかうがいもさすがいがいはにげなし。折々時々の小袖も同じものきては中の町いぶせく夜見世もつらきものから。禿つかへば子もちのごとくはながみたばこはいもと女郎のまで重荷にこづけとやいわん。まわり女郎や新造にいかい事部屋ばいりさるゝも來るなどはいわれず。心よくよべりくつのきつうちがう事なり。帯や上着をかりらるゝもならぬとさすがいひにくし。大事にてもきればよいにと小言いふさへ小聲なり。ちやうちんながへのはりかへこま下駄上草履までよくはやくわるくなるもうるさし。茶すみらうそくのかんりやくのならぬもせひなきならい。茶屋のつけ金船宿わかい者やりてお針かふるかみゆひまで折にふれての心づけ。衣の奉加はまだしも上るり太夫の會のすり物もすらやくにもらうはうしとおもひきや。親方の祝ひ事あるひは法事のそなへ物もまさかすてゝもおかれず。女街がゆすりはしめ木にかけらるゝおもひこそせめ。ことに親里のかなしきたよりきけばひとしほつらさもまさり。むかふの人とよぶこどり禿がつかひのやりくりもあわたゞし。やう／＼客がひとりついたりと思へばうらたはがれそうなとゆだんせぬもくるしきぞかし。わけて紋日のうきかづゆどふふの胸にこたへる晦日々々のかづかさなりて。大つもごりのちやうちんはむねをこがすほのほとや見ん。たのみし客のくめんさへまぢがいの文見ては流に揖をたへたるおもひなるべし。いかにぞ胸つぶるゝ

身のうへかなと未練みれんがおこるとはまるが一時人間萬事いちじきにんげんばんじ中用ちゆうようにしかず。

令子部屋終

昭和三年十月十日印
昭和三年十月十五日發行

特製	第七回配本	追加募集	第三回配本
----	-------	------	-------

【非賣品】

帝國文庫
(第四篇)
京傳傑作集

編輯者 兼 發行者
右代表者 取締役社長
大橋勇吉
印刷者 君島潔

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

株式會社 博文館

東京市小石川區久堅町百〇八番地

株式會社 博文館

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

發行所 株式會社 博文館

振替口座東京二四〇番

製版所 共同印刷株式會社
印刷所 共同印刷株式會社
製紙所 王子製紙株式會社
製本所 金子製本所
發行所 香取製函所



